

大平さんと加藤翁のこと

遠藤 福雄

私の大平さんについての想い出は、限りなく、尽きることがない。一番最初にお目にかかったのは、確か、大平さんが大蔵省で池田さんの秘書官をなさっていた頃で、私はまだ創業間もない神崎製紙の営業担当であった。以来、三十有余年、公私にわたって親しくその醫咳に接してきた。会社のことも何度かご指導を受けたし、個人的な友人としても、ざっくばらんで誠実なご交際を頂戴した。また後年には、はからずも、娘公子が大平さんの二男裕君に嫁ぐということもあって、大平家と遠藤家は親戚の間柄になった。こんなわけで大平さんと私との関係はますます深くなつたが、私が大平さんについて何かを語るとすれば、どうしても記しておかなくてはならない人が二人いる。弊社の創立者で現相談役の加藤藤太郎翁と大平さんの今は亡き長男正樹君である。

そもそも私をはじめ大平さんを訪ねたのも、当時社長であつた翁の命令であつた。翁と大平さんの関係は、お二人が香川県の旧制三豊中学（現観音寺一高）から一橋大学を通しての先輩、後輩というところから始まっている。翁は大平さんに絶対の信頼をおき、大平さんは翁に絶対の敬愛の念を抱いていて、その間柄は傍らの人間から見ても、羨しくなるような、実の親子以上のものであつた。日頃、社業については公正、謹厳な翁も、こと大平さんとなると、人が変わったように夢中になり打ち込まれていた。去年の六月十二日、大平さんが逝去されたことを知つた翁は、急に容態が悪くなり、自らも入院されたほどであつた。一方、大平さんも新人代議士の頃から総理大臣になつても、一貫して、翁の会社のこと、ご健康のこと、そしてご家族のことに深い関心を寄せられ

ていた。毎年、正月の宮中参賀の次には、まず一番に翁のお宅に新年のご挨拶に行くことを恒例として欠くことがなく、時折、宮中より茶菓などの御下賜品があると、家族よりもまず翁のもとに届けられるといった風であった。また私の記憶する限りにおいて、大平さんが弊社に翁を訪問される時には、自分の車を社の玄関に乗りつけるといふようなことは一度たりともされなかった。何時も玄関から離れた場所で車を降り、歩いて玄関に入つてこられた。どんなに偉くなつても先輩に対する礼節を忘れない人だった。

大平さんの長男正樹君が慶応を卒業し、神崎製紙に入社してきたのは昭和三十五年である。入社のも機は、尊敬する加藤翁のもとで息子を修業させたいといふ大平さんの強い希望からだった。正樹君の人は大平さんの人柄をそっくり受け継いだ、実に誠実で魅力ある青年であった。先輩・同僚にも好かれ、時折、社の友人を大勢引き連れて、当時、常務だった私の家を襲った。「ワイ口征伐にきました」と、勝手に酒をみつけて、友人たちに飲ませ、冷蔵庫を空っぽにするのである。今思えば実に爽快なヤング旋風だった。正樹君が大平さんに似てない点は、演説が素晴らしい上手だったことである。当時、官房長官という要職のため選挙の時も地元香川県に帰れない大平さんに代つて、彼は実に感じの良い、堂々たる演説をぶつてまわった。あれで大平さんは随分助けられたはずである。だが、この好青年正樹君も、政務多忙になつた大平さんの仕事を手伝うため神崎を去つて間もなく、外遊中に病を得、帰国後の療養の甲斐なく、昭和三十九年に不帰の人となつてしまった。この時の大平さんの悲歎ぶりは痛々しい限りであった。普段、感情をめつたに現わさない大平さんだけになおさらであった。

そして、去年大平さんもまた痛恨のご逝去になり、正樹君のもとに行つてしまわれた。今はただ、お二人のご冥福をお祈りすると同時に、今後は大平さんに代つて、ご遺族の皆さまのご健勝、ご多幸を見守つていきたいと念じている。

(神崎製紙社長)